

2015年7月30日(木) 1校目

上演1

大阪府立緑風冠高等学校

「太鼓」

第39回全国高等学校総合文化祭
第61回全国高等学校演劇大会

講評速報

生徒講評委員会 担当委員

神宮 寿朗 (瓊浦高等学校・長崎県)

高橋 翔 (島根県立松江南高等学校)

池阪 真緒 (埼玉県立浦和北高等学校)

“戦争とは…”、“生きるとは…”、“平和とは…” いったい何なのか。それらのことを観るものすべてに考えさせる芝居であった。会場全体に太鼓が小さく鳴り響きながら緞帳が上がり、後にそれがどのようにこの作品に関わっていくのか期待に胸が踊る幕開けとなった。

舞台上には中央に塹壕が1つ。塹壕の左右には何もなく、中央が際立った舞台になっており、寂しさと戦争の過酷さを伝えていた。その塹壕には取り残された軍曹と新人兵。故郷のことを忘れられない新人兵と故郷を忘れ戦場の最前線で戦ってきた職業軍人の軍曹のやりとりが続く。2人の死に対する恐怖には違いがある。軍曹は多くの人間を惨殺したことで命の重さが分からなくなり『死』への覚悟ができている。新人兵は死に直面したことがなく『死』への恐怖に打ち震えている。この違いにより、命の大切さにせまる作品となっていた。

物語が進み、舞台両端には新人兵の父や母が投影され、新人兵に生き続けることの教訓と『死』への恐怖を伝える。また、目の前に敵兵が現れるシーンでは、実際は分かり合えていたのに言葉が通じないという壁の前に敵兵を殺してしまう。故郷に帰りたと思う気持ちと兵隊にならなくてははいけないという使命感の狭間で揺れ動く感情を的確に表現し、不気味な青の照明が新人兵の恐怖心を表現していた。太鼓は心音を表現し、新人兵の感情の起伏を物語っていた。敵の奇襲のシーンでは、迫り来る敵兵の足音に臨場感があり、新人兵と共に私たちの心臓の鼓動が早くなるのを感じた。

戦争を題材とした作品に人の『死』について考えさせられるものが多い中、この作品は人の『生』について深く考えさせられるものとなっている。軍曹の「生きなければならない」「生きるために軍隊に入った」という言葉や、命の重みが分からなくなっているという事実から、『生』というものを理解した。

新人兵の父が息子に向けた、「恐怖の心を忘れるな、太鼓を鳴らせ」という言葉からも、戦争がどれだけ悲惨なもので、必死に生きたことさえ忘れさせる残酷なものだということを観る者に訴えかける。新人兵が恐怖に慣れて太鼓の音を感じることができなくなった事実には私たちは驚き、それと同時に悲しさがこみ上げてきた。後に父の言葉によって、新人兵が軍曹のように命の重さが分からない人間にならなかったことに私たちは安堵する。

太鼓というタイトルには心音以外にも、“生きる”というメッセージが込められており、『死』への恐怖を忘れるなということであると理解した。戦争に道徳はない。今年も、“戦後70年”。戦争を経験した人が少なくなってきた現在の日本において、戦争の惨禍を二度と繰り返してはいけない。平和の大切さを再確認させてくれる芝居であった。

